

あなたと 青山学院



地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院スクール・モットー

35万人の卒業生と母校をつなぐ「絆」

November 2017 No.25

今号の聖句 永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。ヨハネによる福音書 17章3節



改革されゆく日本の英語教育と青山学院

日本の英語教育が目指すもの、そして進化する青山学院の英語教育について、英語教育の専門家3名が集まり座談会が開催されました。
大学文学部英米文学科教授であり青山学院英語教育

研究センター所長である木村松雄先生の司会のもと、大学教育人間科学部准教授の高木亜希子先生と英語教育起業家で校友の嶋津幸樹さん(2013年文学部英米文学科卒)に、多角的な視点で語っていただきました。

I. 新学習指導要領について

木村: 2017年3月に文部科学省より告知された新学習指導要領の特色は何でしょうか。

高木: 新学習指導要領では、教員主体の受動的な学習ではなく、生徒が自らの課題と解決に向けて主体的かつ協働的に学ぶ学習としています。英語科については、従来の4技能(リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング)にプレゼンテーションが加わり、5つの技能別として位置づけられました。



高木 亜希子 先生

嶋津: これまでの学習指導要領では、生徒のできないところを洗い出す評価基準でした。それが国際的な基準であるCEFR(ヨーロッパ共通参照枠)のCAN-DO形式によって、生徒のできる点に注目することとなったので、その意味でも進化していると思います。

木村: 2020年には、全国すべての小学校で3年生から英語の基盤づくりが始まります。この初等英語教育が実現可能になるための条件とは何でしょう。

嶋津: 教員の養成が大前提にあり、動画をベースに学ぶことが最も効率がいいと考えます。

高木: 教員が持っている担任力、授業力を生かしつつ、どう効果的に授業を行うかという研修などにも必要があるのではないのでしょうか。

木村: 小学校英語教員への十分な研修機会が保証されるべきですし、自治体によって差が出ないような財政支援などの配慮も必要でしょう。また、本学が岡山県総社市、福岡県田川市と包括的提携を結んでいるように、大学と自治体との相互支援も、初等英語教育の課題解決につながる一つの方法かと思っています。

II. アクティブラーニングを成功に導くための条件とは

木村: 教育現場にはアクティブラーニング(「知識」+「経験」+「省察」)という考え方が入ってきています。

嶋津: 生徒は自分が探究したい、解決したいという問

題を自分でセットすることが一番大事かと思います。教員の役割としては、いかに物事を教えずに生徒から引き出すか、「質問力」が問われると思います。

高木: アクティブラーニングというペア、グループなどによる協働学習を連想しがちですが、まず形態にとらわれすぎないことですね。また、今までは知識を一方向的に教えていましたが、課題解決にいたるプロセスが非常に大事だと思います。

III. 大学の英語教育のあり方とAI・ARの可能性

木村: これからの大学英語教育についてですが、1、2年の教養課程レベルの英語教育はどうあるべきでしょう。

高木: 理科や社会などの教科学習と英語の語学学習を統合したアプローチである内容言語統合型学習、通称CLIL(クリル)を中心とした教育ができるようになればいいと思います。

嶋津: CLILの良い点は、第一言語を使うことだと考えています。これまでは第一言語の使用は否定され、英語だけでやりましようと言われていましたが、今では肯定されています。早い段階でのアウトプットを期待せず、内容重視で行っていくのが良いと思います。



嶋津 幸樹 氏

木村: 専門教育に則した英語の使用を保障する環境を整えるということですね。まさしく、そこが大学教育の重要なところ。最後はやはり3、4年の専門教育課程の中で得た知識や考えを英語でプレゼンできることが重要なところ。

話は変わって、AI(人工知能)やAR(拡張現実)はどのように言語教育に応用できると思いますか。

嶋津: これから先の未来でAIにとって代わることでできない能力が3つあると言われていました。それはクリエイティビティ、問題解決能力、そしてリーダーシップです。この3つのスキルを軸として、教育全般で一つの軸として行えばいいのではと考えています。

木村: スキル中心の英語教育だけでなく人工知能の支援を得ればいいし、特定の目的・場面での英語ならばARによって可能にはなるでしょう。しかし、様々な問題を解決するためには、人間の英知を結集した異文化間理解能力の育成と共有が重要になってくると思います。まさしくそこが、これからの大学の英語教育の課題と言えるでしょう。

IV. 日本初の4-4-4制を導入「英語の青山」に期待すること

嶋津: 初等部から高等部までの12年間の英語教育を3つに分け、発達段階に合わせたカリキュラムに基づく「青山学院4-4-4一貫制英語教育」には期待しています。そして、今後はCLILを用いた指導をしていくことが大事になると思います。

高木: 「英語の青山」と言われるように、本学には英語教育の伝統があります。また、初等部、中等部、高等部の先生方と、それぞれの段階で異文化間能力を育成するために実践していることを話し合ったところ、非常に多様ながら共通するものも多いことが分かりました。この部分の一貫教育を、より重視して行くと良いのではと思います。大学については、これまではそれぞれの学部ごとに英語教育のカリキュラムを構築してきたと思います。今後は各学部の伝統や蓄積も生かしつつ、横の連携も一層強化できれば良いのではないのでしょうか。

木村: 4-4-4制は20年程前、学院の要請を受け、当時の私が持っているものや知っているもの全てを注いで、先生方と一緒に作ったのですが、ややもすると国内版なんですよ。この10年の間にCEFRを意識し、国際版を準備しなければならず、高木先生を中心に検討していただいているところです。



木村 松雄 先生

本日はお二人から大変有意義なご意見を聞かせていただくことができました。ありがとうございました。

座談会の詳細は『青山学報』261号(秋号)に収録

CONTENTS

学校法人	改革されゆく日本の英語教育と青山学院	1
学校法人	大学パワーリフティング部、今号の聖句	2
学校法人	青学ニュース	3
校友会	支部ニュース	4
校友会	部会・同窓会ニュース	5
校友会	学校法人 駅伝応援マップ	8

校友会	アイビーグループニュース	10
校友会	あのこと・そして・いま/歴史研究家 河合 敦さん	12
学校法人	Useful Information	13
学校法人	青学探訪「3つの源流となる学校」	14
学校法人	青山学院からのお知らせとお願い	15
校友会	校友会本部ニュース	16